

グループ空清「輪違屋糸里」講評

出演者の浜崎由利恵さんが終演後のアフタートーク時、お客さんに舞台上から「しんどかったでしょ？」と声をかけられているのが印象的であった。その質問に観客席にほほえましい笑いが産まれた。映画では、スクリーンから俳優が飛び出してきて観客に問う事はもちろんできない。目の前に人がいて観客席にも人がいるライブならではの行為であった。更に小空間だからこその愛おしさを感じた。私はその瞬間から浜崎さんの感じた「お客さんのしんどさ」を抜け出す上演方法があったのではないかと考えている。つまり「浅田次郎氏の物語」をより楽しんでいただくための装置として浜崎さんの身体が存在するわけであったハズなのであるからだ。まずは”朗読劇”という特質な上演形式の上で”しんどさ”を回避するためには、従来の上演形式にこだわる必要は決してないと思った。では浅田次郎さんの物語に「どっぷり」浸からせるためにはどうすればよかったのか。

朗読劇の本質としてあるのは、物語をお客さんの想像力の中でいかに立ち上げてもらうか？である。それは「リーディング（如何に読むか）」だけではなく「リスニング（如何に聴かせるか）」が重要だという事を意味している。「輪違屋糸里」の読み方に関して一言一句変えてはいけないという権利上の問題を乗り越えた上で、とても研究されているように感じ好感を持って観劇することができた。「リーディング」に関しては工夫が十分に凝らされていた。しかし「リスニングしてもらう」観点に置いて、一工夫あれば、“しんどさ”が回避できたと思う。もしかすると、文語体で耳馴染みのない言葉が多い本だったので、浜崎さんの解説→朗読→解説→…と、お客さんに対して解説を挟みながら読んでもよかったのではと思った。物語に遅れをとらず朗読することで物語性を共有できたかもしれない。そういった遊びが物語とお客さんの理解度とリンクしながら進行していくとスリリングさもないまぜになりお客さんの興味を煽る事ができたかもしれない。とここまで書かせていただいたのも、みなしごの「いと」が赤子よのように涙に溺れたシーンは壮観であったし浅田次郎氏のこの本を読みたい気持ちになった。非常に興味深い朗読劇であったことは間違いのないからです。”新たな地平の朗読劇”を切り開いてほしいとアフタートークをお聴きして感じました。